

〈共同研究報告〉

## 十九世紀末における恋愛文学の編成

—— 人情本から小説へ ——

リース・モートン

本論は、「近代日本文学に見られる恋愛観」についての研究プロジェクトの一環である。「恋愛」は、「Romantic love」の訳で、「恋」という見出しのカテゴリに入れられるものであるが、十九世紀以降の日本の詩と散文のモチーフやテーマとして使われるとき、一体どういうものを意味するのだろうか。このプロジェクトの根本にあるのは、文学におけるモダン観に恋愛というテーマが重要な役割を果たしているという主張であり、文学史家や評論家の多くが賛同するものである。<sup>(1)</sup>「恋愛」の調査には、関連する問題として、文学に描かれる女性像、男と女の関係の変遷、それに伴って浮き上がってくる家族の姿があり、そして文学的産物としての主観というのが発展してくるにつれ、文学の主題・構造・人物描写の一部としての「内面性」という概念も、見ていく必要のある問題となってくる。

さらに、恋愛の調査をして行くうちに、文学ジャンルの定義、ジ

ヤンルとジャンルの間の関係、そして、各ジャンルの作品に対する読者の反応など、研究対象は大きく広がって行く。<sup>(2)</sup>人情本というジャンルを検討することで、このような問題の解決をさぐる緒にしたい。ここで、考察するのは、江戸時代のものではなく、近代になってから構成された人情本というジャンルに重点を置く。十九世紀末から二十世紀初頭になってはじめて人情本研究が本格化し、研究者や学術的な出版社が原本の保存や読者に人気のあった人情本の翻刻を出版するなど、このころになって初めて人情本が文芸の一ジャンルとして認められるようになったからである。人情本自体の出版は、二十世紀の初頭にはすでに明らかに廃絶状態にあり、読者の目にも評論家の目にも、徐々に台頭してきた全く独立した存在としてとらえられていた恋愛小説というジャンルに取って代わられていた。<sup>(3)</sup>

これから人情本のいくつかをつぶさに考察して行くわけであるが、先に書いたように、この種の人情本のテキスト分析は、人情本とい

うジャンルがどのようにして発生したのかを解明するものではなく、むしろ人情本が近代の読者にどうとらえられたかに注目し、そして、人情本と恋愛小説という二つのジャンルの近代的な定義を再考するために、「前近代的（プレモダン）」な人情本と「近代的（モダン）」な恋愛小説という二つのジャンルの関係を探ってみる。また、近代の歩みの中で、人情本観というものがどう変遷して行ったかをたどるために、戦前と戦後の評論家と編者の著作を検討してみる。ジャンルとしての人情本というカテゴリーは、現在全く読まれていないだけに、空のカテゴリーであるとも言え、その意味でまずそれを脱構築して人情本の実例のいくつかと比較検討することで、十九世紀の後期と二十世紀にこの読み物の様式について書かれたことの真実性を検証したい。

戦前の人情本評論家——饗庭篁村<sup>あえばこうそん</sup>

戦後の江戸文学者、中村幸彦が好意的に挙げている評論が一つある。饗庭篁村（一八五五—一九二二）の評論である。おそらく戦前発表されたものの中では最も影響力のあった人情本研究ではないかと思う。日本文学と西洋文学の評論家として有名だった饗庭篁村は、一八八七年の『出版月報』に発表した、為永春水（二七九〇—一八四三）の『春色梅児誉美』<sup>しゅんしよくめいよみ</sup>についての評論の中で、次の五点を指摘している。

一に文章は俗語を以て、芸妓、娘らの用語を使いわけてあるをよしとするが、俗語は洒落本に先例がある。洒落本はうがちを事として俗受けせず、『梅ごよみ』は、舌たるい春画体故、俗受けしたるまでにて、俗語の初めとして称すべきではない。

二に、趣向を伝奇的（読本風）の作品にせず、平常に材を選んだのは、よろしいとしても、その内容は獣慾をかき起こすだけのもので、しかも千編一律、どの作品も変化に乏しい。小説としては平常の材を採っても、少しでも作意がなければ、小説は成立しない。その用意に欠けるところがある。

三に、これも趣向の中に入るであろうが、青年男女の情感を識<sup>し</sup>るに足るのみ、理想というものが皆無である……

四に、……故に本当に人情を写したとは称し難い。

五に、要するに、この作品は人の話の速記録の如きである。<sup>(5)</sup>

この引用からわかるように、饗庭は、『春色梅児誉美』の会話体を賞賛しながらも、テーマが男女の情欲であることと「理想」の欠如のために、人情本を小説とみなすことを拒否している。その批評の裏には、明確に言わないまでも、人情本を西洋の小説と比較していることがわかる。そして彼が比較する西洋の小説には、男女の情欲的関係の率直な表現を、非道徳的、あるいは俗なものとして見る、日本でも西洋でも当時の文壇に見られた文学外の要素が含まれているのである。

## 坪内逍遙と村上静人の人情本観

村上静人の「人情本略史」(一九二三)は、比較的手にしやすい本格的な人情本研究論文の中で、最も古いものの中の一つだと思ふ。これは、人情本刊行会が編集した人情本刊行会叢書の再版されたものの中の一冊に掲載されたものである。村上静人の「人情本略史」は、一九一四年から一七年に刊行された初版シリーズには入っておらず、一九二三年から二五年にかけて刊行された再版シリーズの第一巻に入っている。初版シリーズは二十四巻で、再版シリーズは三巻増えて、二十七巻になっている。人情本刊行会叢書についてはあとで詳しく検討して行くが、今はまず、村上静人の「人情本略史」に書かれている彼一流の人情本観を見ていきたいと思います。

人情本略史の最初の文をみると、

我が国の文学は、これを奈良朝文学、平安朝文学、鎌倉時代文学、<sup>あしな</sup>足利時代文学、および徳川時代文学の五期に分つことを得る。そしてその中においても、上には平安朝文学をもつて優<sup>あま</sup>なるものとなし、下にあつては徳川時代の文学をもつて最も秀<sup>ひ</sup>たるものとなす。<sup>(6)</sup>

と書いているほど徳川時代文学を高く評価しているが、あとで示すように、他の研究者はかならずしも、村上の評価に同意するもので

はなかった。とくに人情本について村上は、次のように言い切っている。

すなわち人情本にあつては、従来作者の多く常例手段として執<sup>と</sup>り来<sup>きた</sup>つた、お家騒動、仇討物、合戦記などと異なつて、読者が日常これを経験し、親しく見聞<sup>けんぶん</sup>しつつある題材を捉<sup>とら</sup>え来<sup>きた</sup>つて、いわゆる近代の写実派の態度と全く同一方法と手段をもつて描写したものである。<sup>(7)</sup>

この文章から、村上は人情本を写実小説の一つと見なしていることがわかる。逍遙は一八八五―一八八六年の『小説神髓』に、「紫式部の『源氏物語』、為永春水の人情本等は総じて現世物語の部類といふべし。」<sup>(8)</sup>と書いている。「現世物語」という言葉は、フィクションを、現世の物語に読者が住んでいる世界を描く物語と、過去の物語に昔の世界のことを描く物語の二つに分類する十九世紀英文学の従来の体系と日本の文学を比較することによって、日本文学の系譜を構築しようとしたことから逍遙が使うようになったらしい。また、のちに『新旧過渡期の回想』(一九二五)の中でも、「一九や三馬や春水を比較的今人が喜ぶのは、主として彼らの写実味を、すなわち生の観察とその表現とに於ける技術<sup>ぎじゆ</sup>を買うのだから……」<sup>(9)</sup>と書いている。村上静人の略史の二年後に出版されたこの逍遙の文章には、

「模写小説」と書いて「アーチスチックノベル」というふりがながついでおり、言葉は違うが、「写実派」という村上の人情本の描写が、繰り返されているのがわかる。さらに『小説神髓』では、「現実派は前の二派に異なり。現に在る人を主公とするなり。『梅曆』の丹次郎、『源氏物語』の光君の如き即ち是なり。」と書いている。

「模写小説」にせよ、「現実派」にせよ、「写実」に近く、二人の評者が同じ方向に収束していると言える。出版年こそ後になっているが、逍遙が『小説神髓』を書いたのは村上より前だったことを考えると、この評価をしたのは逍遙の方が先かも知れない。しかし、村上はさらにその評価を発展させている。「彼の平安朝に於ける紫式部の『源氏物語』の如きは、我が国最古の自然主義小説である。」<sup>(11)</sup> といつて、村上は日本の文学伝統にまた「自然主義」を主張している。この主張については、あとで人情本のいくつかについて分析するとき、もう一度考察してみようと思う。

#### その他の戦前の人情本観

村上の非常に肯定的な人情本観に対して、否定的な人情本観はいくらでもある。文学博士笹川種郎は、一九二六年に国民図書より刊行された『近代日本文学大系』の中の『人情本代表作集』で、次のように書いている。

人情本は男女間の恋愛を主とし、市井に於ける色恋のいきさつ、

それからまる義理人情を描いたもので、芸娼妓、囲い者、茶屋女、女房、娘等を環りて、遊蕩児や通人や、町家の堅気者、番頭、無頼漢等を配し、その間に生じた關係を描写したのである。しかしその観察は多くは鋭利ならず、奇警ならず、深刻ならず、文章も変化に乏しく、趣味は千篇一律に墮して、そのうち二三編を読まば、他は類推すべきものである。浮世草子、八文字屋本に及ばず、洒落本、黄表紙、読本に比してすこぶる遜色があり、江戸文芸中、最も劣つたものと云つても、けつして過酷な評ではあるまい。<sup>(12)</sup>

また、その数行後に、

為永春水の如きは、人情本作家の代表者と称せられているが、もとよりの実<sup>へん</sup>に過ぎた片々たる小才に過ぎない。人情本唯一の傑作は春水の春色梅曆やその他の為永の諸編でなくして、むしろ曲山人の娘節用である。人情本をして重からしむるものは、この一娘節用であることを思えば、頗る人情本の落莫たるを思わざるを得ない。<sup>(13)</sup>

人情本の解題を書く学者本人がこういうことを書いているわけである。

数編の人情本が、山口剛による詳しい注釈つきで収められている

一九二八年刊行の『日本名著全集 江戸文芸之部 第十五巻——人情本集』の中に、やはり山口剛の手になる人情本の略史が載っている。校注を見ると、山口の博識がうかがわれるのであるが、「人情本の芸術的価値はあまりに低い。」というほどに人情本を低く評価している。「人情本に好色の漲<sup>みな</sup>っているのも事実である。愁<sup>しゆ</sup>歎<sup>たん</sup>の溢<sup>あふ</sup>れているのも事実である。」<sup>(15)</sup>という文からもわかるように、人情本のテーマとして、山口は好色と愁歎の二つを挙げている。これは村上静人のいう、「世間ある一部に於て、人情本を以て直ちに男女の劣情<sup>れつじやう</sup>を説く愚書<sup>ぐしよ</sup>なり、淫書<sup>いんしよ</sup>なり」という説があるけれども、それは僅かにその一端<sup>いったん</sup>を見て、その全部を評するもの……」に当てはまるだろう。本論の後半で、人情本の作品例を数点分析するときに、このような意見を思い出しながら考察することにしよう。

戦前の人情本研究をほんの数点挙げてみたが、村上静人が英雄的な努力をして読者を説得しようとしたにもかかわらず、全体的に評価は否定的である。尾崎紅葉（一八六七—一九〇三）や永井荷風（一八七九—一九五九）などといった戦前の小説家の中には人情本を大いに賞賛した人たちもいたのであるが、ここでは人情本というジャンルの学術的定義だけにしぼっている。<sup>(17)</sup>

#### 神保五彌の評論

戦後になると、情勢は大きく変わってくる。神保五彌（一九二二—一九二九）はこの時期に人情本について活発に研究を発表した学者で、彼

の見方は、先に紹介した学者のそれよりも、村上静人の姿勢に近いものである。たとえば、神保の『為永春水の研究』（一九六四）では、人情本が、読本や洒落本・滑稽本とはつきりと違った、新しい物語の世界を造形した、と認められると書いている。<sup>(18)</sup>また神保は、一九六七年の『日本文学の歴史第八巻——文化繚乱』の、戯作と人情本についての章「瓊末主義と好色」の中で次のように書いている。少し長くなるが引用してみる。

人情本とは、年若い女性の読者の関心の的であつた男女の恋愛の相を描く小説であつた。

人情本の流行は、封建社会も末期に近づいた時代の世相と、無関係ではない。「源氏」や「伊勢物語」でさえも、男女の愛欲を描いているから女子には読ませないようにすべきだという『女大学』式の封建婦道が、ようやくゆるみ出してきていたのである。同時にまた、人情本の流行は寛政改革後の江戸小説の変貌、大衆文学への移行と無関係ではない。読者としての大衆のうち、それまで忘れられていた女性の読者をつかまえることで、書肆は利益をあげることを計算したのである。

事実、あとで述べるが、人情本の成立と流行とは、そのような書肆の商業主義と密接に結びついている。それだけにまた人情本の恋愛は、年若い女性の愛欲に寄せる関心と興味とに媚びて、情趣的ではあるがいちじるしく扇情的である。西鶴の『好

色五人女』にみられるような、生命の燃焼から発する純粹で、はげしい恋愛はどこにも見いだせない。<sup>(19)</sup>

その数ページ後に人情本の出版について書いている。

たびたびいうように、人情本は女性を相手とする小説である。したがって読本のようにむずかしい漢字を使用し、いちいち振りがないわけばならないということがない。合巻のように全ページ挿絵を用意するという必要もなければ、文字も大きくてすむ、というわけで、その出版費用は読本や合巻にくらべてはるかに安価についた。それゆえ出版する側からいえば、売れる売れないの計算をこまかに考慮しなくても、ともかくも出版しうるものであった。……

その人情本という名称は、天保年間にはいつて為永春水が代表作者の位置につき、彼がその作品を人情本とよんだことから固定化した名称で、一般にはその書型から滑稽本同様、中本とよばれ、内容から文政年間に泣本、書肆仲間の公的名称としては一貫して中型絵入り読本と呼ばれていた。<sup>(20)</sup>

人情本についての神保の考え方でおもしろいのは、人情本は「表芸」であって、春本やわ印（ポルノグラフィ）などのような「裏芸」ではないといっていることである。人情本作者は、春本やわ印

も書いていて、春水の『春色初音之六女』などはその一例である。神保は、ここで「恋愛小説」としての人情本と、ポルノグラフィとして春本のあいだに一線を引いている。<sup>(21)</sup> 神保のいう「表芸」と「裏芸」は、この後で紹介する中村幸彦の「雅」と「俗」とは少し違う。神保は、人情本が対象としたのは元々若い女性の読者であったといい、これは為永春水が女性の読者について触れている箇所が多くあることでも裏付けられている。しかし、江戸文学に造詣の深いピーター・コーニツキによると、「人情本が男性にも同様に人気があったという証拠がいくつもある。」という。<sup>(22)</sup>

神保の次のコメントは、なかなか意味深く示唆に富んでいる。「恋愛描写を重視して、安易に結末を用意するために、春水人情本はしばしば妻妾和合の、一夫多妻のハッピーエンドに終わっているのである。<sup>(23)</sup>」神保はまた、人情本の性質を分析するのに「風俗小説」という言葉も使っている。「しかし、一方ではまた春水人情本は、甘美な江戸の下町情調の中に、場面・情景を洗練された会話と写実的な筆致で表現し、さまざまな恋愛の相を描いた風俗小説として完成している事も事実である。」<sup>(24)</sup>そして、最後に、最終期の人情本について、次のように言っている。「……幕末になって金水の門人、梅亭金鷲や、また二世梅暮里谷峨、山々亭有人などの作者が、春水流の人情本、それもより退廃の色濃い作品を発表している。しかし、質量ともに著しく低調で（あった）……」人情本の専門家はほとんどこの見地に賛同しており、彼らがどのような美的基準でも

って判断しているのかを検証するためにだけでも一読してみる価値はありそうである。

神保は、時代が変わっても意見を変えていないようで、一九九一年の新潮社の古典文学アルバム『江戸戯作』にもこう書いている。

人情本は女性を読者として江戸庶民の恋愛の種々相を描くものであったから、描いた人間はもとより、構想も類型的である。ただ会話を主とした恋愛場面の確な描写、背景になる江戸庶民の日常生活の描写のみごとさなど、人情本に近代的な風俗小説の性格を与えて（いる）<sup>26</sup>……

#### 中村幸彦の人情本観

中村幸彦は人情本に関する研究書を数冊書いている。ここでこのジャンルに関する彼の総合的な評価をみきわめるために、そのサンプルをいくつか紹介しよう。まず、一九六二年出版の『春色梅児誉美』の校注に、『梅児誉美』に限ったことであるが、こう書いている。

近代小説に類似の点、すなわち長所のみあげて来たが、もちろん近世小説としての、種々の限界をも持っている。作中人物の性格を述べて、読者とともにあった作者春水の姿勢にふれたが、春水は、もちろん近代作家と違う。当時の戯作者の常で、こと

に読者を念頭から離れたことのない作者であった。しかも彼が予想した読者は、教養の低い一般的な中本の読者であった。その読者の影響で得た長所は前述したが、それは少なく短所の方が多かった。全般をおおう、日本古典文学の残滓でもあるかのように、よどんだ情趣主義、一口では徳川封建的ともいへき、現代とちがった暗さ重さは、いわゆる江戸マニヤはともかくとして、現代人には甚だ異質的であるが、これらは最も時代的な作者であった春水のあらわれである。<sup>27</sup>

そして、一九八二年出版の『中村幸彦著述集』に収録されている「人情本と為永春水―付『梅ごよみ』へんちき論」というかなり詳しい研究論文に、先に紹介した饗庭篁村の人情本論に対して、饗庭は西洋の典籍評論法を日本土着のフィクションのジャンルに使っているから非常に低い評価になるのだという意味のことを書いている。

これを逆にいえば、明治の文学青年も、人情本を読みなれていたらこそ、西欧の新しい小説理論をも、どれほど正確であったかに問題は残るが、一応受け入れることが出来、またその理論、またその西欧の作品に模して、新しい作品を書けたのであるまいか。坪内逍遙の『当世書生氣質』や二葉亭四迷の『浮雲』にも、人情本の余燼が色濃く残っているではないか。<sup>28</sup>

さらに、人情本の問題点を明確にしている。

幕末の雅文学は、文学論で新しい方向を示しながら、作品はこれに追従しえなかった。俗文学の方は作品の表現は早くも新しい試みをしながらも、文学意識は、娯楽以上のものと言い得ず低迷していった……<sup>(29)</sup>

全体的にみると、中村は人情本をあまり高く評価していないと見受けられるが、これは、文学を「雅」と「俗」にはつきり分けるといふ彼の美的評釈を反映しているといってもいいだろう。この評釈を使えば、大衆文学などは、最初から「高雅」な文学に対して劣ることになるはずだと思う。

#### 前田愛と人情本

前田愛（一九三二―八七）は、いくつかの著作の中で人情本について触れており、後学の徒にかなりの影響を与えている。一番おもしろいのは、一九七三年に初版が出た『近代読者の成立』に載っているものである。

人情本は……貸本屋の背に運ばれて、二倍三倍にも回転した人情本の読者の数が、寛政度の洒落本のそれをはるかに上回っていたことも勿論である。民衆教化をもくろむ改革当事者が神経

を尖らせたのは、直接には人情本の好色性であったけれども断が寛政の改革の場合よりも厳しさを加えたのは、その通俗性・大衆性を無視し得なかったためでもあった。<sup>(30)</sup>

また、前田愛は、『都市空間のなかの文学』の中で、為永春水の『春色袖の梅』について、次のような言い方をしている。

春水の意図がこうした郊外生活の実体をリアルに描きだすよりも、郊外の自然で美化された二人だけの世界の幻想を紡ぎだすところにあつたことはいうまでもない。<sup>(31)</sup>

そして、春水の人情本について一般的に次のようにも書いている。

しかし、こうしたソープ・ドラマふうの甘い隠遁の幻想が、独りよがりなスノビズムの産物であることもたしかなので、郊外生活のディテイルは春水特有の美意識で隙間なく裏打ちされているにもかかわらず、物語そのものはこのうえもなく退屈なのである。<sup>(32)</sup>

この考え方については、のちほどもう一度取り上げてみたいと思う。



## 最近の研究——丸山茂

人情本についての最近の研究と、このジャンルについて設定された仮説の一例として、丸山茂の一九九四年に出版された『春水人情本と近代小説』という著書を調べてみよう。丸山は、「近世小説」と「近代小説」にはつながりがあるという。しかし、「近世小説の単なる延長線上に近代小説があるとするものでないことは言うまでもなく」というただし書きがついている。<sup>(33)</sup>「春水人情本」は近代小説の母胎であるという、それまでの評論家の見解をうけつぎ、さらに本居宣長と『源氏物語』についての「ものあはれ」論の影響をとりあげて、まず、「天保年間の初めの『春水人情本』の確立が成し遂げられ、そこでの「人情」が恋愛中心である……<sup>(35)</sup>とし、さらに、「梅暦物」五部作（が）……江戸期唯一の写実的・長編「恋愛小説」を現出させることになった。」<sup>(36)</sup>としている。

丸山は、「人情」を「情欲」として捉え直すことで、「恋愛」を深く捉えることが出来るようになり、近世小説から近代小説へとという流れができたという。<sup>(37)</sup>丸山は「恋愛」にそれほど重点を置いたのはなぜだろうか。次の引用を見ればそれがわかるかと思う。

恋愛は個の感情の解放、個の自由の確立を志向する特性を有するとされよう。従ってそれは自分自身と、さらには自身を取り巻く現実との拮抗を多くの場合強い、かくしてさまざまな人生

の局面に当事者を逢着させる。そしてこの時人間性の真実性が試みられるであろう。この人間と現実との関わりの深みから個の自立を企図し、人間性を表出せしめる「恋愛」を取りあげる近代小説の基盤に、封建制度下、恋愛を肯定して、当代市井男女の、特に女性の側のひたむきな愛（人情のまこと）を描いた為永春水の人情本があり、（これまで見てきたごとく）その展開線上に『当世書生気質』『浮雲』『舞姫』が位置（して）……自身を新しい時代の新しい表現の文学たらしめていった。<sup>(38)</sup>

つまり、丸山は、最もよくできた人情本に表現された恋愛を、近代性の印としてみている。それだからこそ、丸山は鷗外の『舞姫』を近世小説の流れの上にあつて、なお近代小説としての新しい歩みを刻んだと認めるわけである。<sup>(39)</sup>しかし、丸山は春水の『梅暦』と『舞姫』とが似ていることに注目しながらも、「『舞姫』の」豊太郎とエリスとの愛の、悲惨な結末についてである。春水人情本が、ハッピーエンドに終わるのに対し、……これはあまりに大きな違いと言わねばならない。<sup>(40)</sup>というコメントを書いている。

丸山はまた、樋口一葉（二八七—一九六）の『たけくらべ』（二八九五—一九六）と『梅暦』とにも近似性を見つけている。これは、これから人情本と、恋愛と、近代小説の関係を見ていく上で、もう一度考察しなければならないと思う。

## 人情本についての評論のまとめ

ジャンルを考察する上で、十九世紀末から二十世紀初頭の人情本を調べるのではなく、人情本というジャンルが形成された時期についてなぜ考察しないのかという疑問もあるかと思う。これには理由がある。まず、人情本は、洒落本や読本とは別に、十九世紀の半ばごろから読まれるようになってきたものであるということに異議をささむ余地がないことである。そして第二の理由として、十九世紀末、明治という新しい時代と日本文学という概念の確立の一端として、日本文学の「正典」とみなされる作品群が生れ出したことである。二、三十年の時間的隔たりがあるとはいえ、同じように書かれたストーリーが、なぜ片方は「人情本」で、もう一方は「小説」としてはつきり異なるカテゴリーに入れられるのかと考えてみた方がいいかもしれない。そして、「小説」は日本文学の伝統の正典として誰もが認めるところであるのに、「人情本」はなぜそうではないのか。逍遙や一葉や鷗外などの作家が書く恋愛についての小説と、人情本との関係はどんなものか。

これらの疑問についてさまざまな仮説が、先に紹介した評論家たちによって提案されている。しかし、とくに最近二十年ほどの間に、「正典」(英語では「canon」でカノンと訳されることもある)という概念や、ジャンルの成立過程ということが重要視されるようになってきている。たとえば、日本では鈴木貞美、アメリカではジョン・ビ

ロング、イギリスではフランク・カーモードやエリック・ホブズバウムといった学者たちがこれに注目している<sup>(4)</sup>。これらの学者は、ジャンルの再定義、伝統の創出、カノニシティ(正典性)の概念という観点から文学史を読み直そうとしているのである。「近代日本文学に見られる恋愛観」を考察するために、これらの概念を、人情本、恋愛、そして近代性に適用して考えてみたいと思うのである。

### 人情本の定義あるいは再定義——原本

人情本の原本は、主に大学、国や地方自治体の図書館などに保存されている。しかしこれらを完全に網羅する目録を見つけることは出来なかった。一番手にし易いのは『国書総目録』(一九六三—七六)で、大きな図書館なら必ずおいてあると思う。九冊がセットになったこの目録は、三冊セットの『古典籍総合目録』(一九九〇)によって補完されている。『群書類従』も有名である。

これらの目録も、現存している人情本の原本のリストとなると、完全とはいえないのが実情である。個人の蔵書としては人情本の原本が保存されているはずだが、目録には載っていない<sup>(5)</sup>。もう一つの問題は、かなりの数に上る人情本の原本が、現存していないらしいことである。目録でも、翻刻だけしか残っていない人情本がかなりあることを示している。通常「翻刻」というと、再版とか、複製版という意味で使われるが、人情本の場合は、厳密には必ずしもそうであるとは限らない。また、原本があっても、木版刷りであるため、

刷りによって、かなり違いがある場合があるということである。原本(a)と原本(b)は、同じ話でも、登場人物の名前が違ったり、題名が違っていたりすることがあり、つきあわせて比べてみる必要があるらしい。<sup>43)</sup>

このころは、ほとんどの図書館のカタログがインターネットで検索できるようになっているが、たとえば東京都立中央図書館の特別文庫室にある人情本の原本のカタログは、インターネットでは検索できない。貴重な資料であるから、貸し出し禁止なのは当然であるが、原本の状態が非常にデリケートなため、コピーを取ることも制限されている。この図書館に所蔵されているものが、有名な人情本の唯一現存する原本であることも珍しくないのである。

もう一つ疑問に思うのは、読者のことである。いつこれほどまでに貴重なものになったのか、一般の読者の手に入らなくなったのはいつのことなのだろうか。当時の読者は、貸本屋を通して人情本を読んでいたことがわかっているので、原本の損傷が激しく、現存する原本の数が少ないのも納得がいく。それでも、数多くの原本があるはずだと期待していただけに、『国書総目録』に載っている数冊しか原本がないということに驚いている。徳川幕府が風俗取締りとして人情本など『好色本』の出版を禁止したとき、一斉に破棄したということも一因であろう。ピーター・コーニツキは、一八四二年に荷車五台分の人情本が没収され、破棄されたという記録があると書いている。<sup>44)</sup>「江戸の華」といわれた火事や、一九二三年の関東大

震災、そして第二次世界大戦時の東京大空襲も一つの要素に違いないと思う。

原本に関するこのような問題は、人情本というジャンルの調査の方法に、直接大きく関係してくる。

### 翻刻

現在、人情本で手に入り易く、読みやすいのは翻刻版である。原本は手書きのテキストを木版にして刷ったものであるが、翻刻は、活字を一本ずつ並べ組んで印刷しているので読み易くなっている。

本論で考察するのは、一八三二年初版の曲山人(二八三六?)作『小三金五郎仮名文章娘節用』という人情本である。この人情本のテーマはあとで検討するとして、ここではまず、この人情本の各種の翻刻版を比較検討して、翻刻という出版メディアにまつわる問題を理解する手がかりにしたい。翻刻版の中で、一番古いのは、一八八二(明治十五)年に出版されたものである。東京都立中央図書館で一八八六(明治十九)年に出版された翻刻版を調べてみた。百八ページからなるこの本の奥付には、翻刻出版人・廣野仲助、発兌・上田屋栄三郎、そして発行所は東京麴町の栄泉堂となっている。

この翻刻と、東京都立中央図書館特別文庫室に保管されている原本をつぶさに比べてみたところ、テキストに関する限り原本に非常に忠実であることがわかったが、挿絵が全く異なっており、やや色

つばさが増している<sup>(45)</sup>。原本はコピー禁止であったため、この翻刻版を原本と同じとみなし、これと、他の翻刻版を比べてみた。調べた翻刻版のうち、第二次世界大戦の数年前のものは、文章の一部が割愛されていたり、伏せ字があったり、線が引かれていたり、別の言葉に置き換えられていることがわかった。戦前にはどのような文章が、読者にとって刺激的すぎると判断されたのだろうか。

まず、一八八六年の翻刻版(a)と一九二五(大正十四)年の村上静人の編集による人情本刊行会叢書の再版(b)とを比べてみよう。

#### 【比較例 一】

(a) 下女「ハイハイかしこまりましたト(枕を置いたへゆく) 金五郎ハ目を明て当たり見回し枕を取てまたね転び 金七段目の由良と云計略だサアもつと此方へよんなト(小三の手をとりひきよせる)<sup>(46)</sup>

(b) 下女『はいはい、畏りました。』と、枕を置いて下へ行く。金五郎は目を開いて、四辺見回し枕を取つて又寝転び、金五郎「七段目の由良といふ計略だ。さあもつと此方へ寄んな。』と、小三の手を取る。<sup>(47)</sup>

引用部分を検討する前に、この二冊の翻刻版の全体的な特徴を先

ず比較してみるとおもしろい。一八八六年版は、表紙の裏側に、読者の興味をそるために内容の広告を載せており「文政十二年辛卯孟陽 江戸 文盲短齋しるす」と書いてある。文政十二年は、一八二九年である。両開き一頁の挿絵のあと、題名のあとに、「江戸曲山人補綴」となっている。しかし、奥付には、著者として、為永春水のペンネームである教訓亭為永の名が見える。先に書いたように翻刻出版人は、廣野仲助となっている。曲山人の人情本の「著者」は、他でもない為永春水なのであるが、これは人情本を売るために、よく用いた手であるらしいが、翻刻版でも同じ手を使っている。一九二五年の翻刻版は、非常に分かり易く、村上静人による解釈がついており、たとえばなぜ曲山人を著者でなく、補綴としてあるのかなどの説明がついている。村上によると、この人情本は間違いもなく曲山人の著作であり、こういうことは当時よく行なわれていたことであると記している。村上は、初版の緒言も収録、挿絵は曲山人の絵をもとに、歌川国直が描いたものであるとしている。しかし、一九二五年版の挿絵は、原本の挿絵を再現しているものの、復刻したものではない。この引用文のある章は、一八八六年版では、ただ「第三回」と記されているのに対し、一九二五年版では「初編下の巻」と書かれている。

引用文(a)と(b)では、句読点などが少し違うだけで、大きな差はない。(a)の一八八六年版では、フリガナがまばらに付けられているが、(b)の一九二五年版にはほとんどの漢字にフリガ

ナが打たれている。一番大きな違いは、(a)にはある「ひきよせる」という部分が、(b)では削除されていることである。金五郎が小三をひきよせて次のラブシーンへ移ることを想像させる言葉である。「七段目の由良という計略」というのは、人形浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』の主人公、大星由良之助が、仇を討つ計略を相手に悟られないように遊郭に上がって、遊女と戯れる段に言及しているのである。(b)では、「小三の手をとりひきよせる」の代わりに、「小三の手を取る」になっている。このわずかな削除で何が変わっているだろうか。金五郎が横になつていて、忠臣蔵の由良之助に言及しながら小三の手を取るという情景だけで読者には充分そのシーンが理解できるはずである。「ひきよせる」という言葉が猥褻であると判断されたことは不思議としか言いようがない。

【比較例 一】

(a) 小三「ヲホ、ハ、厭でございますヨ 金「寝るのが厭か 小三「どうだか存ませんとかほをあかくしてうつむく 金「ナニしらねへことが有ものか誰かにおそはつて御座じだらう ドラ一寸あらためて見ようト帯も心も打解て契り染たる湯かた びら玉の汗をやしぼるらんかくて是より金五郎八千歳屋へ人をハしらせ……<sup>(48)</sup>

(b) 小三「オホホホホ、厭で御座いますよ。」と心も打ち解

けて、契り初めたる湯帷子<sup>(49)</sup>。

かくて是より金五郎は、千年屋へ人を走らせ……

(a)の一八八六年版でははっきり描写されていることが、(b)の一九二五年版では、二、三行割愛されて、ほのめかされているに過ぎなくなっている。それでも、気が抜けたようになってしまつてはいるものの、描写されているシーン自体はかなり色っぽい。

【比較例 三】

(a) 金「甘く云ぜしつぽりとしんねこではまぐりのお吸物をしめてる人がのふお菊さん……<sup>(50)</sup>

(b) 金五郎「うまく言ふぜ。しつぽりと真猫で、のうお菊さん。』<sup>(51)</sup>

(a)の一八八六年版には載っているお菊という遊女の性的な描写が、(b)の一九二五年版では削除されている。

【比較例 四】

(a) 金「違へねへ色気がなくつても汁氣が有ハ沢山だのふバ、アトこえをかくれバうバもふきだし うバ「ヲホ、ハほんにさよでござい升私しのやうに色気も汁気もなくなつてはいけ

ませんが「御新造さんなどハ……」

(b) 金五郎「違えねえ、色気がなくつても艶気があれば、沢山だ。のう老婆」と、声を懸くれば、乳母も噴き出し、乳母「オホホホホ、真に左様で御座います。私の様になつてはいけません、御新造さんなどは……」

金五郎と乳母が性的な冗談を言い合っている場面である。(a)の一八八六年版では「汁気」となっているところが(b)の一九二五年版では「艶気」となり、また、「色気も汁気もなくなつてハ」という部分も削除されているが、もとの情景を壊してはいない。

#### 【比較例 五】

(a) たば「ヲやおまへさんそんなことをおつしやるが炬燵と云者ハ能もので云ふに云ハれぬ楽しみが有升よねハ小三さん小三「なんだねおたぼさんおつな事をお云でない人の鼻を磨やうな私らアそんな事ハ嫌サ金「コウおたぼさんお前も余程好物家だね成程一寸いちやつくにハマんざら悪ねへやつさ冬の色事ハ炬燵で出来るやつがいくらも有ものさ 小三「もしおかしくもないそんな話ハ……」

(b) (おたぼ)『おやお前さん、そんな事を被仰るが、炬燵と

いふものはよいもので、また別な楽しみがありますよ。ねえ小三さん。』

小三「何だね、おたぼさん、乙な事をお言ひでない、人の鼻を磨る様な。私らアそんな事は嫌ひさ。」

金五郎「こうおたぼさん、お前も余程好物家だね。』  
小三「もし、可笑しくもないそんな話は……」

ここでも、やはり(a)の方が少し直接的な表現で性的な行為に言及しているのに対し、(b)は、ほのめかすだけにとどめている。

#### 【比較例 六】

(a) 金「ハハハ、そんなら乳母の所へ行って寝ろ今日を覚して泣出すとおつかアの何のか邪魔になるさうだ」

(b) 金五郎「ハハハハ、そんなら乳母の所へ行って寝ろ。』  
と、……」

(b)の一九二五年版で、「今日を覚して泣出すとおつかアの何のか邪魔になるさうだト」をなぜ削除したのか、理解しがたい。一八八六年頃には何ともなかった文章が、一九二五年には、母親の子供に対する愛情への冒瀆として看過できないものと判断されたのだろうか。

【比較例 七】

(a) 金「なんの事たおかしくもねへそんなつまらねへ事を案  
 じずにサアもふ寝ねへか寝るがいゝト(手をのバしひきよせる)  
 小三「アレまだ着物も着換ませんよ 金「いゝハな着物ハそれ  
 でも大事ねへト(いひつゝ小三の)帯を解バ嬉しげに上着を脱  
 下着の儘に寄添て」顔み合せて互に(につこり)……

(b) 金五郎「何の事た、可笑しくもねえ。そんなつまらねえ  
 事を案じずと、さアもう寝ねえか、寝るがいゝ。」と、顔見合  
 せて互に莞爾<sup>(59)</sup>

ここでも、一八八六年版の方が少しあからさまであるだけで、一  
 九二五年版もほぼ同じ情景を描写している。

【比較例 八】

(a) (金)「……床へ侵入て又いゝ夢でも結ト(ぐつと引よせ  
 ひとつ夜着)何成事や契るらん<sup>(60)</sup>

(b) (金五郎)「……床へ侵入つて、又いゝ夢でも結ぼう。』<sup>(61)</sup>

一八八六年版で著者が読者に対して「どんなことをしたんでしょ

うねえ」という感じで問いかけているくだりを、一九二五年版で村  
 上が割愛しているのは、おそらく一九二五年頃の読者の繊細な感性  
 を損なうことを恐れたからなのだろう。

さて、さらに比較するために、一九三六(昭和十二)年に出版さ  
 れた同じ話の翻刻を見てみよう。これは、大日本雄辯会講談社が出  
 版した評釈江戸文学叢書の中の一冊である。翻刻本というよりも校  
 注本で、笹川種郎による校注がついている。次に挙げる六ヶ所が直  
 線に置き換えられている。

一、ト(ぐつと引きよせておびをとり)<sup>(62)</sup>

この一行は、一八八六年版ではそのままだが、一九二五年版では、  
 比較してみなければこの行が削除されてしまっていることは分から  
 ない。一九三六年版では直線に置き換えられているので、この箇所  
 に削除された文章があったことが分かる。

- 二、寝るの
- 三、誰かにおそわつて
- 四、ドラちよつとあらためて見よう。
- 五、帯も
- 六、玉の汗をやしぼるらん

この五ヶ所は、【比較例 二】の(a)の部分と同じ部分であり、削除箇所が直線に置き換えられているので、それを再現してみよう。

小三「ヲホ、ハ、ハ、厭でございますヨ 金」——が厭か 小三「どうだか存ませんとかほをあかくしてうつむく 金」ナニしらねへことが有ものか—— 御座じだらう  
ト——心も打解て契り染たる湯かたびら  
かくて是より金五郎八千歳屋へ人をハしらせ  
……

線が引かれている部分を補うと、次のようになる。

小三「ヲホ、ハ、ハ、厭でございますヨ 金」寝るのが厭か 小三「どうだか存ませんとかほをあかくしてうつむく 金」ナニしらねへことが有ものか誰かにおそはつて御座じだらうドラ一寸あらためて見ようト帯も心も打解て契り染たる湯かたびら玉の汗をやしぼるらんかくて是より金五郎八千歳屋へ人をハしらせ……

一九三六年版には、一九二五年版では完全に割愛されていたり、書き換えられていた文章のうちの一部分だけを直線に置き換えていることが分かる。大正時代には削除されていた「はまぐりのお吸物

をぬめる人が」は、ここでは原文のままになっている。

最後にもう一つ、今度はもう少し古い鼻山人による一八一七年の『娼妓美談 籬の花』について、原本と翻刻を比べてみた。原本の題は『青楼籬の花』になっているが、同じ話である。中央図書館に原本の複写がある数少ない人情本のうちの一冊である。

比べた翻刻版は、村上静人が翻刻にあたった一九一五年出版の人情本刊行会叢書の一冊である。編集者の村上静人は、この作品についての解題に、『娼妓美談 籬の花』は、人情本の祖たる蒟蒻本、即ち洒落本の一つで……と書いている。この作は、人情本よりも古いこんにやく本、洒落本の一つであるという。もう一度、いったい人情本というジャンルはどういうものなのかという疑問が浮かんでくる。そして、この話を読んでもみると、ほとんどの人情本とは少し違った種類の「小説」に近いものであることがわかる。この意味でも、翻刻と原本をつきあわせて、どれほど変えられているかを調べてみる価値があると思う。

隅から隅までチェックしてみた結果、変えられていたのはたったの一ヶ所、一九一五年の翻刻版では、「ト夜着の中へはいり笑いながら二人ともに夜着をすっぽりかぶる」というト書きが削除されているだけであった。

当然のことながら、武藤元昭が翻刻編集している一九九五年の叢書江戸文庫の中の第三十六巻「人情本集」をはじめ、戦後の翻刻はすべて原本に忠実である。そして、一九六二年刊行の為永春水によ



る人情本『春色梅児誉美』（中村幸彦校注）と二〇〇〇年の『風月花情春告鳥』（前田愛校注）は、いうまでもなく原本に忠実な上に、詳しい学術的な情報が満載されている。

しかし、原本は失われ、戦前の翻刻しか現存しない作品が多い今、人情本を研究するとき、書き換えや削除の程度を知った上で戦前の翻刻を活用する意義は大きいと感じる。

#### まとめとテキストの分析

人情本を最も多く集めたシリーズとして、人情本刊行会叢書の二つのシリーズがある。初版シリーズは、一九一五〜一七年にわたって刊行され、赤い表紙の本二十二冊と、人情本世話小説刊行会叢書と呼ばれる青い表紙の二冊の合計二十四冊で、非売品であった。非売品であっただけに、現在は非常に手に入りやすく、幻のシリーズと呼ばれている。そして、それを一九二五〜二六年にわたって編集し直した再版シリーズは、初版シリーズの二十四冊を配本順序だけ入れ替えて再印刷したものに第一巻と第二巻、そして第二十七巻を補足した赤い表紙の合計二十七冊である。人情本または江戸文学の専門家の間では、都合の良いくない箇所が削除されているため、研究材料として信用できないテキストであるという観念が持たれている。収録されているすべての人情本について、原本とつきあわせて調べてみたわけではないので、この通念について、何ともいうことは出来ないが、今回調べてみた限りから判断すると、変更されている部

分は、ほんの二、三の文章だけで、たいしたことではないように思える。削られたり置き換えられたりした文章や言葉は、すべて遠回しに性的な行動に言及しているもので、たとえこれらの文章が削られていても、読者は文脈から何か色っぽいことが行なわれていることを推察できる。

村上静人は、各巻共通の緒言に次のように書いている。

泥中の白蓮は、泥中におき、濁水中の鯉魚は、必ず濁水中に捨てておかねばならぬという必要はない。汚泥を洗い清めて玉盤に移し、濁水から洗い去って……

校訂者として村上静人は、汚いと判断する表現を削除する姿勢であることがわかる。戦前の人情本翻刻版校訂者によるコメントなどから、明治中期から第二次大戦前まで、人情本は、エロチックな文章で不道徳的なものであるという一般的な受け取り方をされていたらしいことがうかがわれる。しかし、ここで見てきたように、翻刻版で削られた表現は、現代の読者にとっては刺激的といえるものではなく、むしろ直接的な性的表現を避けながら男女の人間関係を描いたものと判断できるだろう。

人情本は扇情的なきわどい描写はするが、具体的には描かない。読者の想像をかき立てる思わせぶりの描写の線と筆をとめてい

る。彼女は静かに体を開いたといった叙述がふつうになり、彼女が何度失心したとかと臆面もなく書く失心派の現代作家の小説にくらべれば、江戸小説の方が健全である。<sup>(67)</sup>

と神保五彌が書いた通りである。

近世の読者が「人情本」というラベルのもとに読んだ読み物とはどんなものだったのかを知る上で、このような考察は重要であると思う。インターネットで検索してみると、村上静人が編集した人情本刊行会叢書による一九二五〜二六年出版の再版シリーズは、奥付に非売品と書いてあるにも拘らず、かなりの量が流通したことがわかる。非売品と書いてあるのは、人情本刊行会の会員に月ごとに配布するという形をとったからかと考えられる。貸本屋と貸し出しをする戦前の公共図書館の存在とがあつて、かなりの量が流通したようである。今回の執筆のために数多くの翻刻版を見てみたが、その中でも読みやすさでは人情本刊行会叢書が一番であつた。それは、この叢書の改行の仕方やレイアウトが、我々が慣れ親しんでいる近代小説とほとんど同じ書式を使っているからである。

一九八五年に出版された坪内逍遙の『当世書生気質』の岩波文庫版は、その改行の仕方とレイアウトが、初版の仕様に忠実なため、人情本の原本のそれに近い。<sup>(68)</sup>そのため、刊行会叢書に収録されている人情本の翻刻は、逍遙の小説よりも近代的に見える。

さてここで、何が「近代小説」と呼ばれるのか、そして「近世小

説」とは何であるかという疑問にもう一度戻ることになる。この問題を深く検討するために、そしてこれまで見てきた戦前と戦後の評論家による論述に見られる人情本観が肯定されるのか、または修正されるのかを考えるために、いよいよテーマ別に選んだ人情本を分析していきたいと思う。

### 『娼妓美談 籬の花』(一八一七)

村上静人は、この作品の解題で次のように論じている。

此『籬の花』は、その形式こそ洒落本であるが、内容は既に後世の人情本の性質を帯びている大蒟蒻本である。……此種のものは、洒落本中でも多く後期のもので、その形式内容共に、すでに人情本に近くなったものが多い。が、特にこの『籬の花』と、此前年に出た振鷺亭の『寒紅梅丑の日待』とは、最も人情本に近いもので、これが一転して、文政に入つて、人情本となつた萌芽の一つと見ることの出来るもので、この点からも、この『籬の花』は、特に注目すべき価値のあるものである。<sup>(69)</sup>

そういう意味では、『籬の花』が大変面白い人情本と言えると思う。洒落本から人情本へという過渡期を示す人情本の一例で、人情本というジャンルを定義あるいは再定義するには、ぜひとも考察すべき作品である。また、鼻山人という作者についてのいわゆる「定

「説」を検討する上でもこの人情本には意義がある。たとえば、神保五彌が『為永春水の研究』(一九六四)という書で鼻山人をこのように評価している。

しかし、洒落本の読者と人情本の読者が明らかに異なる以上、そこに作者の通人としての姿勢が露骨に看取されるのでは、郭の描写は人情本にあつては無意味である。<sup>(70)</sup>

洒落本の読者と違って、人情本の読者は主として女性であつたため、遊郭をよく知る者の視点からの詳しい描写などには興味がなかつたということを言うのである。六頁の後、神保は、鼻山人の『言語光沢 合せ鏡』について、「こうした春水流の鼻山人の人情本は、実はこの一作で終つていた。」<sup>(71)</sup>と書いている。そして、神保は鼻山人に次のような最終評価を与えている。

鼻山人が伝奇的構想を重視する態度を捨てられないならば、それはそれとして、なお戯作者として生き残ることは不可能ではなかつた。春水に比較すれば、所詮は二流の作者にすぎないと私は見るのであるが、二流は二流なりの活躍は可能だったのである。趣味的な生活、通人としての彼の姿勢が戯作者たることを失格せしめたのである……あらゆる意味で、鼻山人はしよせんは二流の作者である。<sup>(72)</sup>

神保はどのような基準に基づいて鼻山人をこのように評価したのだろうか。

まず、『籬の花』の内容を要約する。花魁の梅川と中の島屋の客の八右衛門の会話から始まる。梅川の金の無心に対して八右衛門は冷たい顔をしている。八右衛門は、忠兵衛という男が梅川の隠れ男ではないかという疑いを抱いているので梅川の無心を断ろうとしているのである。梅川は八右衛門に対する忠誠を誓う証文Ⅱ起請を書くくと約束する。実のところ、梅川は忠兵衛に恋しているのだが、次に引用する文に梅川の企みが説明されている。

鏡台の抽出から剃刀を出し、八右衛門が目の前にて、葉指の爪の下を思ひ切つて切り、血のぼたぼた落ちるを紅猪口の中へ受けて起請を書く。これを血起請という。又墨にて書くときは己れが名の所へ血をつけるなり。……(中略)……若し背かば、あらゆる神神の御名を記して、御罰を蒙らんと認むるなり。……(中略)……御はつを蒙らんと書きしは誠なり。また御はつを蒙らんと認めしは、皆嘘なり。何故といふに、御はつと認むれば、文字に当らざる故、仮令誓を破りても、罪にならずと言ひ伝ふ。諸客この心得あるべし。梅川がこの時の起請も、定めて御はつと認めしに疑ひなし。<sup>(73)</sup>

忠兵衛はある商家の養子で金が自由にならず、女郎である梅川を  
請け出せない。彼を助けるために、梅川が八右衛門から金を巻き上  
げようとしている場面である。

明くる日に八右衛門が、忠兵衛と梅川が会っているのを見て、彼  
女に対する疑いをつのらせ、金を出すことを渋る。

八右衛門『理屈といふものア何うでも付き易いもので、何だか  
虚飯にされたやうで根ツからうまらねえ。よしんば忠兵衛は酒  
の上が悪いにしろ、思う存分なことをして心も晴れようが、  
此方の身の上は、篋棒にはねていやす。』と、段々話がからん  
できて、かの十五兩の無心もわきのけとなり、節句のしまひも  
覚束なければ、梅川はこゝぞ大事な場所と心を定め、屏風の外  
へ出て鏡台の抽出より剃刀を出し、勝山の鬚を、根元よりぶつ  
つりと切り落とし、屏風のうちへ侵入り、何にも云はずに忍び泣  
き。

八右衛門は、梅川が髪うめがはの乱みだれたるを見て吃驚びくくり、

八右衛門『此この頭あたまは、どうしたのだ。』

梅川『お帰かへりなんす道みちで、お捨すてなんすまでも、どうぞ、持もつ  
てッておくんなんし。』

八右衛門『やりてにでも知しれたら、どうする。』

梅川『其その様な事ことは厭いとひせん。』

八右衛門『そんなら、忠兵衛をつき出す心こころか。』

梅川『綺麗きれいに突き出して、主ぬしのお顔かほをたてえす。』

八右衛門『左様さやういふ心こころなら、何も彼かも云いふ事はねえ。すっぱり、  
俺おれが世話せわをしてやるから、必ず苦勞くろうにしねえがい。節句せきぐのし  
まいも呉服屋ごふくやの注文注文も、思う通りとおにするがいい。』と、胴卷どうまき  
から十五兩の金を出して、梅川に渡す。

梅川『有難ありがたうおざりいす。』と、包つみの儘ま煙草たばこ益ごん盆ぼんの上うに載のせる。

八右衛門『何なんぞまだ、不自由ふじゆうなものがあるなら、さう云いつて、  
寄越よこすがい。』と、切きつた髪かみを鬼おにの首くびでも取とつたやうに、鼻はな  
紙がみを出だして包つむなり。梅川はもう占しめたものと、漸やう心こころ落おちつ  
き、

梅川『あれさ、それぢやア窮屈きうくつでおざりいす。』と、後あとはぼち  
ぼちの話しはなしもとどまる所ところは、たゞいとしいと可愛かあいいの、二ふたつ枕まくら  
にしぼし夢ゆめを結むすぶ。

髪を切きつてうまく金をせしめた梅川は、カツラをつけて何食なにわぬ  
顔かほで座敷ざしきに出いでいる。そこへ忠兵衛がやつてくる。ここで作者はユ  
ーモアを入れて話を締めくくりにかかっている。

忠兵衛『久ひさし振りだ。一つやろう。』と、盃さかずきを投なげてやり、ぐ  
つと立たつて梅川が鬚まげぶしをむずと掴つかみ、ぐいと引き抜ぬけば、も  
とより入髪いれがみ故ゆゑ、すっぱりと抜ぬける。皆みな々な吃驚びっくり。

そして、最後。

かね四ツの拍子木、チヨンチヨンチヨン。

これより、梅川忠兵衛八右衛門が仕打如何なるか。後篇を待ちて見るべし。

村上は、この話に続編があることを予告しているが、これは人情本である印で、洒落本ではない。この話はほとんど世に知られておらず、神保も鼻山人についての章で、この作品には触れていない。神保がなぜ鼻山人を二流と断定したのか。この作品はそれほど質が低いのであろうか。

この作品の文体と構成上の特徴、たとえば、作者が直接読者に語りかけていることや、コメディの構成になっていることなどは、十八世紀の英国の作家ヘンリー・フィールディング（一七〇七—一七五四）の『*The History of Tom Jones, A Foundling*』（一七四九）とよく似ている。効果的に口語体が使われ、芝居の様相を呈していることは、歌舞伎が人情本に大きな影響を与えたことを思えば、驚くことはないだろう。現代小説の「写実的な会話」に非常に近い。また、作者が直接読者に語りかける手法も、現代小説では珍しくない。ある意味で、ストーリーは、遊郭文化の解説になっている、短い漫画的な注釈のようにも見える。この作品が人情本の最初の作品ではないにしても、ごく初期の作品であるが、その内容には、感動的

な愛の宣言が盛り込まれている。しかし、この作品を「恋愛小説」と分類することはできないし、その言葉の意味をよほど曲げて解釈しないではロマンス小説ともいえない。とは言っても、人情本というジャンルの創始期にあたる一八一七年のこの作品に、成熟し完成した人情本を期待するというのは無理なことである。

たかが四十八ページ（翻刻されたテキストで）のこの「短編」は、なかなかおもしろく、私見では、それほど悪い作品とは思えない。鼻山人は、登場人物の人物描写を試みており、近代の作家、たとえば永井荷風などの一九二〇年代の作家の短編作品と比べると足る作品になっている。しかし、今日固定されてしまっている人情本に対する観念を覆すことのできるほどではない。次に、もう少し内容のある作品を見てみよう。

#### 『小三金五郎仮名文章娘節用』

この作品は、人情本の専門家のほとんどが高く評価しているものである。戦前の評論家では、山口剛と笹川種郎が挙げられる。山口はとくに情熱的なようで、このストーリーの由緒をさまざまな形態の文学からたどり、次のように書いている。

小三金五郎という名は、元禄の昔から人口に膾炙していた。額の  
小三と歌舞伎役者金屋金五郎のかなしい恋は、小唄、祭文、  
浄瑠璃などいろいろの形で謡はれている。

山口は、小三と金五郎の恋を描く他の先行作品と比べて、曲山人の人情本がはるかに優れているとしている。

戦後の評論家の中では、中村幸彦の評価が興味深い。

主人公の一人小三が、置き手紙をして死ぬことによって、自己の信念をつらぬこうとする行き方などは、近代小説に於ける「自我」をさえ思い出されるとも評され、人情本の発生をここに置くべしとする説もある<sup>(28)</sup>。

『娘節用』のあらすじを紹介しよう。主人公は、金五郎とお亀という恋人たちである。鎌倉の武家、仮名屋文字之進には二人の息子がいて、長男は文之丞、次男は文次郎という。文之丞は、大名の側室と恋をして駆け落ちをし、京都で商売を始めて成功する。一人息子、金五郎を授かるが、愛妻は亡くなってしまふ。ここに、ある貧しい夫婦がいて、年老いてから二人の娘を授かったが、母親は亡くなり、幼い二人の娘を育てられないでいる男を助けるために、文之丞は二人のうち妹お亀を引き取って、金五郎と兄妹のように育てる。弟の文次郎は家を継いで結婚し、お雪という一人娘をもうける。金五郎とお亀は、兄妹のようでありながら互いに恋心を抱いているが、金五郎が十七歳のとき、祖父である仮名屋文字之進に呼び寄せられて、鎌倉へ行くことになる。文字之進は、ゆくゆくは、いとこ同士の金

五郎とお雪を結婚させて家を継がせたいと考えたのである。一方、金五郎が鎌倉へ行ってから六ヶ月後に、お亀は人買いに拉致されて、鎌倉の遊郭に売り飛ばされてしまふ。

金五郎は、鎌倉の遊郭で、小三と呼ばれる遊女になったお亀に再会し、夫婦の契りを固め、金之助という息子が生まれる。文字之進は、金五郎と遊女との関係を知り、金五郎がお雪と結婚できるように、小三に金五郎としばらくのあいだ関係を断ち、結婚後は密かに妾として会ってもよいと直談判する。

小三は、金五郎がお雪と結婚して幸せになれるよう、昔は同じく遊女であったが今は紫雲という尼になっている姉に息子の金之助を預けて自殺する。小三の亡骸を発見した金五郎は嘆き悲しみながらもお雪と結婚するが、悲しみを乗り越えられずに自暴自棄になつて行く。文字之進は、金五郎の嘆き方が普通でないのを怪しんで調べ、小三が金五郎と兄妹のようになつて育つたお亀であることを知るに至る。文字之進は、事実を知つていれば、別の仕方もあつたものをと小三の死を悼み、紫雲が世話をしている金之助を引き取って金五郎とお雪が育てるように計らい、二人は大いに喜ぶ。お雪は、小三が金五郎に宛てた遺書を発見し、小三の心根に感激して金五郎に見せる。金五郎は、それを読んで小三の遺志を大切にして、自暴自棄の生き方をやめ、良き夫、良き父親になる。めでたし、めでたし。

最も高く評価されているこの有名な恋物語は、いわば、十九世紀の日本の恋愛小説の典型で、次の引用は、恰好のサンプルを提供し

てくれる。

お亀「何のまあ勿体ない。夢にもそんな心は持ちません。仮令業平さんが生まれ代つて参りましても、私は貴郎に見かへる心は、爪の垢程もござりませんよ。」

金五郎「いゝ加減な事をいふ。見かへる心は富士の山程あるだらう。」

お亀「もうもう、貴郎は何故其の様に、私が申すことを、お疑ひ遊ばしますすえ。」

金五郎「疑りやアしねえけれど、嘘らしい云ひ様だから、それが真実誠なら、必ず短気を出さねえで、便りをするのを待つて居なよ。」と、背をさすれば、お亀は嬉しく、

お亀「私ほどの様にも、待つて居る気で御座りますから、何卒吃度お便りを、早くなすつて下さりまし。」と互につきぬ名残の涙、いとし可愛もまだ知らぬ、明の烏のなくなくも、お亀は金五郎が支度する、傍に持物など取り揃へる中、用意ごとごとく整ひしかば、いざ出立とさざめくを、金五郎は流石にも、後に心の残れども、詮方なければ氣をとり直し、父とお亀に別れを告げて、迎ひの者と諸共に、心強くも旅立を、今が名残と文之丞、お亀も共に門辺まで、送り出でつつ金五郎の、影見ゆるまで見送れば、あなたも見返る別の涙、互に胸のうやもやに、隠れて姿は見えずなりぬ。

この引用文の会話はかなり写実的であり、ロマンティックな語り口で語られている。この翻刻の肝心な部分は、原本に忠実である。先に紹介したように、削除や書き換えが見られるのは、性行為をほめかしている個所だけであり、それも、現代の日本の小説のあからさまなものとはほど遠く、フィールディングの『Tom Jones』などのような近世の英語の小説と比べても、何でもない表現なのである。

行き場のない恋人たちの悲しい運命は、小三の自殺でさらに悲劇的になり、この点こそ、この作品以前に同じ題材で書かれたものと違う点であると多くの評論家が評している。愛のために自己を犠牲にする小三は、ロメオとジュリエットやトリスタンとイゾルデなどの西洋の伝統的な悲恋を彷彿させ、日本の伝統では、和泉式部や小野小町の和歌や、近松門左衛門（二六五三―一七二四）の『心中天の網島』（一七二〇）、六十年後に書かれた森鷗外の『舞姫』のエリスと豊太郎の悲恋を思い起こさせる。丸山茂は、一九九四年出版の『春水人情本と近代小説』という著書で『舞姫』と春水の『梅暦』との類似性、とくにお長とエリスのおもかげが似ていることを指摘している。お長は丹次郎といっしょになって幸せになるが、小三は金五郎と結婚できずに死ぬ。『舞姫』のエリスは、豊太郎と結婚できないうちと同じ理由で気が狂う。豊太郎がロシアを旅しているときに受けとるエリスからの悲しいラブレターは、小三が自殺する前

に金五郎に宛てた手紙を思い起こさせる。丸山のいう『舞姫』と『梅暦』との類似性よりも、『娘節用』の方に類似点が多いかもしれない。<sup>(80)</sup> 鷗外が『梅暦』を読んだという証拠があるからには『娘節用』も読んでいて不思議ではない。<sup>(81)</sup>

人情本が近世文学または江戸文学のカテゴリーに属するのか、それとも近代文学に属するのかという問題について、この『娘節用』の存在は、少なくともこのようなカテゴリー間の、そしてジャンル間の区別が、少なくとも流動的かつ曖昧なものであり、まかりまちがえば虚偽であることを証明する強力な証拠を提供している。人物描写、筋書き、そして語り方などからは、『娘節用』と『舞姫』などの明治の有名なロマン小説との違いがほとんどないからである。

#### 『春色江戸紫』（二八六四）

先に検討した人情本と同じく、この作品も多くの他の作品を融合してできた混合種<sup>ハイブリッド</sup>である。翻刻版に書かれている解題によると、『江戸紫』は、著者不詳であったものを、書肆文永堂の依頼で、その当時の洒落をまじえ、蛇足を省き、足らないところを補う形で、山々亭有人<sup>さんざんていありんど</sup>（一八三二—一九〇二）が補作したものである。このプロセスは、ほとんどの人情本の制作がそうしたものであったらしく、現在「著者」といわれている人物が書き下ろしたものは珍しいので、表紙に「補作」や「補綴」などと書かれたものが多い。著者という考え方がどちらかといえば曖昧で、とくに先の『春色梅見誉美』の

成功にあやかつて為永春水作とされる「春色」シリーズの人情本にはこれが当てはまる。春水が、春色シリーズの会話の部分やその他の部分に他の作家を用いたことはよく知られている。書肆・版元（春水自身、越前屋長次郎という書肆の主人であった）が指揮して人情本を作り上げる過程は、北斎などの画家の木版画を多くの職人が刷り上げる過程に通じるものがある。

一八四二年の天保の改革で、為永春水が風紀を乱した罪で手鎖の刑に処せられてからは、当局のしがめを受けないように、無名の作者名のまま出版することも多くなったと推察される。

村上は、この作品の解題に、「当時非常に愛読されたものである。」と書いている。<sup>(82)</sup> ストーリーは次の通りである。惣次郎は江戸の裕福な商人松坂屋善兵衛の息子で、善兵衛の妻お貞の姪、おくみと婚約している。お貞は作品の冒頭で、惣次郎が自分の子ではないことを告げて病死する。善兵衛には善次郎というもう一人の息子がいるが、彼もお貞の子ではなく、お牧という妾の子である。お貞の死後、性悪女のお牧が別宅から来て善兵衛の妻の座につく。善次郎はおくみに思いを寄せており、お牧は、自分の息子の善次郎に店を継がせようと企む。惣次郎は、自分が養子であることを悩んで店から出て遊興にふけるようになり、おくみに善次郎と結婚するように勧める。

惣次郎は、花魁お楽と恋に落ちるが、おくみのことも忘れられない。おくみも惣次郎への想いを持ち続け、善次郎のものにはならな



いという決意をしている。惣次郎の荒んだ生活が、善兵衛の店の大坂の本家に知れて、善兵衛は本家の手前、惣次郎を勘当しなければならなくなり、勘当された惣次郎は、お楽からおくみからも離れて、一人で出奔する。おくみは、実家を助けるために、善兵衛の店から多額の借金をしていたため、お牧からその形の代わりに善次郎と結婚することを迫られるが、それを断る。おくみの実家は店と家財を売り払わざるを得なくなる。

上方の絹問屋で働いていた惣次郎は、大金を稼いで江戸へ戻ってくる。そこで主を亡くした元側室の智清という女隠居といい仲になる。智清との関係が続いているのに、惣次郎は彼を待ち続けていたお楽のところへ行つて一緒に住もうと誘うが、花魁の身でなかなか自由にはならない。おくみは姉のお絹と一緒に住んでいたが、ある日惣次郎とおくみはばったり出会う。しばらくして惣次郎はおくみに一緒に住もうと誘い、智清との関係を断つて二度と会わないことを誓う。

おくみが惣次郎の家に来て、初めて夫婦の契りを結んだ次の日の朝、惣次郎はおくみへの愛を宣言する。おくみの実家の店を買い戻し、お楽と智清を訪れる。智清は惣次郎の浮気をなじるが、おくみとのいささつを聞いて、気を直し、二人の友達になる。惣次郎は買った店を守りたてて繁盛させる。弟の善次郎は、店がうまく行かず、惣次郎に謝つて店の経営を依頼する。惣次郎は両方の店を繁盛させ、おくみを正妻に、お楽を妾にして三人仲良くいっしょに幸せに暮ら

す。

同時代の読者は、為永春水の『春色梅児誉美』との相似にすぐ気がついたはずである。惣次郎とお楽とおくみとの関係は、『春色梅児誉美』の前半の、丹次郎と芸者の米八と許婚者のお長との関係に並行している。山々亭有人の三人の主人公は、春水の主人公たちとあまりに似ているので、ほとんど丸写しの観がある。タイトルに人氣を博した「春色」という言葉をつけたことから見ても、三十年ほど前に出た春水の有名な人情本を非常に意識していたことは確かである。

この作品を喜んで読み、三年後の一八六七から六八年にかけて書かれた山々亭有人の次の作品『春色玉櫛』<sup>なまぎ</sup>が出るのを待ちかねて買いに走つた読者たちは、失望しなかつたはずである。それほど『江戸紫』と『玉櫛』の二作には共通点が多い。

『江戸紫』の表現法と文体は、分かり易く、おそらくこの作品のモデルであった『春色梅児誉美』を含む他の人情本よりも、日常語や現代の小説の文体に近い。文学的には『娘節用』の熱情のパワーにはとうてい及ばないが、半世紀ほどして出回るようになる大衆的な恋愛小説ジャンルに非常に似て、大正時代の大衆小説にさきがけてもいる。この点で、この作品には、一般に「モダン」であると認められている大衆小説というジャンルへつながる点がいくつも見られる。近代性というものを歴史化するというのは難しいが、文学的価値に乏しいとはいえ、『江戸紫』は、のちに大衆的人氣を博した恋

愛小説というジャンルに見られる特徴を備えているということができる。「春色梅児誉美」と比較すると、丹次郎は正妻と妾二人を得てめでたく話が終るのに対し、惣次郎は正妻と妾一人を得るにとどまっており、一夫多妻の男性天国から、少し離れて行った読者の好みの移り変わりを反映している。所詮、山々亭有人も、他の人情本作者達も、アマチュアであれ、プロであれ、市場の需要のままに書いていたことは疑いがないのである。

原本はもう少し冒険的であったのかもしれないが、次のシーンは、惣次郎とおくみが初めて夫婦の契りを結ぶ場面で、とくに日常会話の使い方を見ると、人情本がいかに「モダン」に近づいているかが示されている。

惣次郎 『十二間の悪い事があるものか。』

おくみ 『左様いふ訳ぢやア、ありませんけれども、唯間が悪いと申したんですわね。はらさんご人に苦勞させて置いて、其様なにおいぢめ遊ばさずと、宜いぢやア御座いませんか。』

惣次郎 『いちめる所か、自己は可愛くって可愛くって、天窓から食つて仕舞ひたいやうだ。』此の時おくみは莞爾笑ひ、

おくみ 『巧く被仰いますねえ。』

惣次郎 『俺は少しも巧く言やアしねえが、お前こそ巧く言はア。』

おくみ 『何が。』

惣次郎 『それでも昨夕、これで死んでも本望だと言つた癖にして、間が悪いなんぞと言ふからよ。』

おくみ 『存じませんよ。憎らしい。』と、惣次郎を抓る。

惣次郎 『アイタタタ。其様な可愛らしい指で、ひどく痛いの。此の様子ぢやア善公を抓りつけて居ると見えるの。』

おくみ 『又あんな憎らしいことばかり。』

惣次郎 『もうもう抓るのは御免だ。』

おくみ 『それぢやア、最う其様な事を被仰いますなよ。』

惣次郎 『ハイハイ、畏りました。中直りに一服つけてお呉れな。』

おくみ 『最う起きませうか。』

惣次郎 『最う起きよう。』

これより前のシーンに人情本に典型的なコメディイ（原本はこれよりももう少しつやつぱい可能性がある）の例が見える。

金太郎（下僕） 『オイ、お前、何方から来た。』と、金太が艶なき挨拶を、惣次郎は気の毒さうに、

惣次郎 『コレサ、他人様に何といふ物の言ひ様だ。』と、金太を吐りて、それへ出で、

惣次郎 『何方から、お出でなせえやした。』

女 『イエ、私は往來の者で御座いますが、何とも申しにくい

ご無心でございませうが、憚所を拝借致したう御座います。』  
 惣次郎『夫は何よりお易い御用ぢやアありますが、ホンにまだ  
 仮住居で御座いますから、むさくるしくとも宜敷くば、御遠慮  
 なく。』

女『有難う存じます。』と、云ひつゝ女は表へ出で、主人とお  
 ぼしく年の頃、三十路の上を越してはあれど、美麗しきゆえ二  
 十四五かと思はるゝ、故人糸三半四郎丸出しといふ年増盛り、  
 明石縮に縞の重、鳩羽鼠の被布を着たるは、言はでもしるき武  
 家の後室、前の女は小腰を屈め、  
 女『いざ此方へ。』と言ひさまに、彼の後室を初めとし、附き  
 添ふ女中七八人、どやどやと入り来るに、金太は益々呆れ果て、  
 金太郎『モシ旦那、とんだ者が舞込んで来やしたね。アノ同勢  
 が皆小便をたれたら、後架が刎ねていけやすめえ。』  
 惣次郎『コレコレ、滅多な事を言ふな。』と、眼付で知らせる。<sup>(85)</sup>

これは、典型的な戯作のユーモアであり、後に近代的な小説に生  
 まれ変わって行く素地となる要素ではあるものの、ストーリー自体  
 が馬鹿げているため、一見近いように見える明治の小説もまだまだ  
 遠いようである。

### 『春色玉櫛』

この作品が今まで見てきた人情本のなかで最も年代的に現代に近

い。原本が残っていないので、村上の解題に頼るしかないが、一八  
 六七〜六八年の出版となっていて、明治時代になってから書かれた  
 人情本としては最古のものであるかもしれない。物語の時代設定は  
 一八五六〜五七ごろである。村上はこの作品の解題で、物語の当  
 時、実際に各界で活躍していた人物を描いていることを挙げて、こ  
 の作品（実は、人情本全体について）の写実性を強調している。<sup>(86)</sup> 挿絵  
 については、各巻共通の凡例に、五十点あれば、やむを得ず一、二  
 点を省く以外は、全部を収めることを目指し、鮮明を期するため  
 原本からそのまま製版することは避け、画工に平均一枚に一日を費  
 やして原本そのままに浄写して製版に回した、とある。<sup>(87)</sup> 原本が残っ  
 ている作品についてつきあわせて検討してみた限りでは、村上が書  
 いたように挿絵は原本に忠実である。

前田愛など、挿絵は人情本を読むという行為の必要不可欠な部分  
 であると主張する研究者もあれば、人情本を朗読するときの音の方  
 が大切であると主張する研究者もいる。しかし、ここで何点かの原  
 本を調べてみた結果、挿絵の与える視覚的インパクトよりも、文字  
 にされたテキストの方が、かなり比重が大きいという私見を持った。

この作品のストーリーは次の通りである。鎌倉の裕福な呉服屋、  
 萬右衛門には子がなく、それだけが悩みの種だった所へ、番頭の忠  
 兵衛が関西へ仕入れに行つた帰りに、十歳の三吉というみなし子を  
 連れて帰つて来たので、自分たちの子のように習い事をさせて育て  
 ていたが、二年して妻のお貞に子ができるが、出産のときにお貞は

亡くなってしまう。その子は千代と名付けられる。三吉は、二十一歳のときに三十郎と名を変え、店の支配人の一人として働くようになる。萬右衛門は関西の名家の末の子、駒三郎を養子として迎え、ゆくゆくはお千代の婿にして店を継がせようと考えている。そこへお牧という美しいが性悪の後妻が来る。お牧は新十郎という子を産む。

お牧は、自分の子に店を継がせたいと策略を練る。お千代は大名の女中奉公に出され千代次と名が変わり、駒三郎には遊蕩の生活にふけるように仕向ける。駒三郎は白綾という花魁と昵懇になる。お牧が駒三郎を本家へ返そうとするところへ、三十郎が動いて、駒三郎と千代次を結婚させ、白綾を妾にして解決しようとするが、白綾が妊娠したことから話はこじれ、駒吉という息子を産んだあと、白綾は自殺して息子を駒三郎と千代次に託す。ここで読者は、必ず白綾と『娘節用』の小三を重ねて読むはずで、白綾もすべてを説明する書き置きを残している。

大名屋敷で奉公している千代次は主人に気に入られ、側室にされそうになるが拒否して萬右衛門亡き後の店へ戻ってくる。千代次との結婚を勧める三十郎に従わずに、駒三郎は番頭の娘お清と恋に落ちて一子を儲ける。番頭は奉公人としてそれを許すわけに行かず、二人の仲を裂こうとするが、二人は駆け落ちしてしまう。

病床にある千代次の所へ三十郎が見舞いに行き、千代次の回復のためには自分の命を捧げてもいいという想いを口にする。そして千代次が昔から三十郎に恋していることを知るが、奉公人の身の程を

わきまえて千代次の想いを受け入れない。そこへ関西の名家の主人が現れ、お牧の企みを暴き、お牧を出家させる。また、孤児と思われていた三十郎の生い立ちを調べた結果、自分の息子であったことが分かったと告げる。本家の息子である三十郎は、晴れて千代次と結婚して店を継ぎ、駒三郎はお清と結婚し独立して店を持ち、ハッピーエンドとなる。

この人情本は、『娘節用』と『江戸紫』から借りてきている点が多々あるものの、愛の幸福な結末として一夫一婦の結婚を設定している点で、これら前作とは大きく違っている。さまざまな会話や手紙で構成されているこの作品は、八十パーセントが口語体で書かれている。三十郎が本家の息子と分かって初めてお千代と結婚できることになることから見て、この人情本で、当時の階級意識、身分構造を確認できる。このテーマは、検討した人情本のほとんどで見られるものであるが、ここでは、義理と人情（愛）の葛藤という江戸時代の典型的なジレンマに苦しむ女性を描くことで表現されている。次の引用は、二人の主人公が互いに対する愛を表現しており、理想化された恋愛がこの作品の主要なテーマであることが分かる個所である。駒三郎のお清への愛は、すぐに性的な情熱に移り、巧みな表現でそのテーマを読ませる所であるが、流れが切られている感じがするのを否めない。調べた限り、この人情本については原本が存在しないので、この翻刻版が唯一現存のテキストのようである。

駒三郎『自己も此家へ来た時から、温厚やかで愛嬌があつて、風流気があると云ふものだから、死ぬ程惚れちやア居るものゝ、  
 恩人の一人娘。若し間違でもあつちやア、恩を仇だと、胸を摩つたのは毎日のこと。もうもう、義理も糸瓜も入らねえ。ダガ、お清さん、何様せ何時迄も知れずにやア居ないから、万一忠兵衛の耳へ侵入つて、引き離さるゝ其の時は、死ぬ気で居ないぢやア行けないぜ。』

お清『貴君といつしよに死ぬのなら、今でも否とは申しませんが、無お千代さんが。』

駒三郎『彼様な者は、何様でも宜いやね。』

お清『余り左様でもありません。』

駒三郎『其様なことを言ふと、斯様するよ。』

お清『アレ、こそぐつちやア否ですよ。』

駒三郎『なんぞと言つて、逃げ出す癖に。』

お清『左様ぢやアありません。』

駒三郎『ソレ、大きな鮑が。』

お清『オ、否だ。』と、ぴつたり寄り添ふ。<sup>(88)</sup>

先に書いたように、作者の山々亭有人によるおもしろいコメントが、第二篇初回にあるので紹介しよう。

嗚呼粹なるか三十郎。貞なるか白綾。遊里に恋なしといふ廃

儒者。傾城に誠なしと云ふ不通作者。未だ駒三郎が如きを身に知らざれば、然もあるべし。<sup>(89)</sup>

有人の意図は明らかである。愛は遊郭でも生きている、芸者も恋に落ちると言いたいのである。白綾を自殺させているのは、この作品の雰囲気や『娘節用』以上の文学的な高みへ引き上げるための有人の試みなのだろうが、必ずしも成功はしていない。それでもたくさん魅力のある作品である。人情本が恋愛小説に最も近づいた作品とも言えるが、現実性の欠如や三十郎の素性の種明かしなど、非常に姑息なメロドラマ風で、明治時代の作品を彷彿させながらも樋口一葉や森鷗外の作品に見られる写実性にはほど遠い。

伊藤整の『日本文壇史——明治思潮の転換期 第六卷』によると、山々亭有人は永井荷風の作文の先生であつたらしく、明治の作家たちがいかにこの人情本作家を尊敬していたかがうかがえる。<sup>(90)</sup>

#### 人情本から小説へ

本論のさまざまな論証を見て分かるように、近代と前近代との一線をどこにひくかは、検討する作品によつて異なるが、とくに言葉に関しては、古い人情本よりも、新しい人情本にこれが当てはまる。もっと多くの人情本と、幸堂得知（二八四—一九一三）などの

明治初期の作家の作品、たとえば一八九九年の人情本に非常に近い『目出度心中』などの作品を検討して、どこにこの一線を引くべき

か研究を重ねる必要がある<sup>(9)</sup>。人情本は、大衆小説の初期形態であると決めるなら、鷗外などの純文学にその類似性や流れを探すのではなく、明治の大衆小説というカテゴリーにそれを探すべきだろうが、その境界線もうつろいやすくあいまいである。また、これまで坪内逍遙の『当世書生気質』、『二葉亭四迷の『浮雲』』、そして『舞姫』と為永春水の『春色梅児誉美』とを結びつけた丸山茂のコメントなど、明治の小説と人情本の結びつきはたまに指摘されるだけである<sup>(10)</sup>。『目出度心中』などは、近代小説というよりも、近代的または明治の人情本として読まれるべき作品で、その境界線のあいまいさを示している。

もし明治時代初期に書かれた人情本は、後に大衆小説と呼ばれるようになる新しいジャンルの作品とみなされるべきだとすると、たとえばいわゆる「続き物」と呼ばれる明治の大衆小説の理解と分類を考え直すことになるのではないかと思う。このような作品は、鷗外や一葉などという作家の高尚な作品ではなく、大衆小説と同一線上におく方が、役に立つのではないだろうか。そう考えると、人情本と大衆小説というそれぞれのジャンルを再評価する必要が出てくるだろう。これが人情本の再定義に関わる諸問題点について予備調査をしてみても得た、いわば仮の結論である。

注

- (1) このテーマについての筆者の他の論文には次のものがある。
- “Akiko, Tomiko and Hiroshi: Tanka as Conversation in Fin-de-siècle Japan”, *Japanese Studies: Bulletin of the Japanese Studies Association of Australia*, 14:3 (1994), pp. 35-50.
  - “Love as Literary Construct: Erotic Tropes in the Poetry of Akiko, Tekkan and Tomiko”, *Proceedings of the Midwest Association for Japanese Literary Studies: Love and Sexuality in Japanese Literature*, vol.5, (Summer 1999), pp.101-111.
  - “Courtly Love in France and Japan: an Introductory Study” in *Variete: Perspectives in French Literature, Society and Culture*, ed. by Marie Ramslund (Frankfurt am Main: Peter Lang, 1999) pp. 307-324.
  - “The Aesthetics of Modernism: The Case of Fin-de-siècle Japanese Poetry” in *Frontiers of Transculturality in Contemporary Aesthetics* (Turin: Trauben, 2001) eds. Grazia Marchiano and Raffaele Milani, pp. 235-251.
  - “The Birth of the Modern: Yosano Akiko and Tekkan’s Verse Revolution”, Chap. 1 of Morton, Leith *Modernism in Practice: An Introduction to Postwar Japanese Poetry* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2004).
- 「鉄幹・晶子・登美子の歌壇」『言語文化論叢』第十二巻（東京工業大学外国語研究教育センター、二〇〇八）一〜二十頁
- (2) このことに関連する筆者の小論も参照されたい。“The Canon-

- ization of Yosano Akiko's *Midaregumi*" *Japanese Studies* Vol.20, no. 5 (Dec. 2000) pp. 237-55.
- (3) Romantic Fiction II 恋愛小説というカテゴリーについて多数の研究書がある。代表的なものに、佐伯順子『色』と『愛』の比較文化史』(岩波書店、一九九八)、小谷野敦『男の恋』の文学史』(朝日選書「五九〇」一九九七)がある。
- (4) この人情本の一部分を英訳したものに、Chris Drake in *Early Modern Japanese Literature: An Anthology 1600-1900* ed. Haruo Shirane (New York: Columbia University Press, 2002) pp. 762-99 がある。
- (5) 中村幸彦『中村幸彦著述集』(中央公論社、一九八七)第四巻、四八七—四八八頁に引用されている。
- (6) 村上静人「人情本略史」『人情本刊行会叢書 第一輯』(人情本刊行会、一九三三)一頁
- (7) 同右、二〇頁。
- (8) 坪内逍遙『坪内逍遙集』『日本近代文学大系 全六十巻』第三巻(角川書店、一九七四)八〇頁。
- (9) 坪内逍遙『逍遙選集』(第一書房、一九七七)第一二巻、三二—六頁。
- (10) 坪内逍遙『坪内逍遙集』一五九頁。
- (11) 村上静人「人情本略史」五三頁。
- (12) 国民図書株式会社(編)『近代日本文学大系——人情本代表作集』第二十一巻(国民図書、一九二六)五一—六頁。
- (13) 同右、六頁。
- (14) 山口剛(編)『日本名著全集 江戸文芸の部 第十五巻——人情本集』(日本名著全集刊行会、一九二八)一〇八頁。
- (15) 同右、九〇頁。
- (16) 村上静人「人情本略史」三六頁。
- (17) 神保五彌「瓊末主義と好色」『日本文学の歴史——文化繚乱』第八巻(角川書店、一九六七)三八一頁にある尾崎紅葉と永井荷風についての記述を参照。
- (18) 神保五彌「為永春水の研究」(白日社、一九六四)三〇六頁。
- (19) 神保五彌「瓊末主義と好色」三七二頁。
- (20) 同右、三七四—三七五頁。
- (21) 同右、三七五頁。
- (22) Kornicki, Peter *The Book in Japan: A Cultural History from the Beginnings to the Nineteenth Century* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2001) p.263.
- (23) 神保五彌「瓊末主義と好色」三八〇頁。
- (24) 同右、三八一頁。
- (25) 同右、三八一—三八二頁。
- (26) 神保五彌「江戸戯作」『新潮古典文学アルバム 二十四』(新潮社、一九九一、再版一九九五)六五頁。
- (27) 中村幸彦(校注)『春色梅児誉美「日本古典文学大系」第六十巻』(岩波書店、一九六二)一八頁。
- (28) 中村幸彦「人情本と為永春水——付『梅ごよみ』へんちき論」『中村幸彦著述集第十一巻』(中央公論社、一九八二)四九〇頁。
- (29) 同右、四九〇頁。

- (30) 前田愛『近代読者の成立』(岩波現代文庫、二〇〇一)三頁。
- (31) 前田愛『都市空間のなかの文学』(ちくま学芸文庫、一九九二)一一七頁。
- (32) 同右。
- (33) 丸山茂『春水人情本と近代小説』[「新典社研究叢書七三」](新典社、一九九四)七頁。
- (34) 同右。
- (35) 同右、一二頁。
- (36) 同右、一三頁。
- (37) 同右、三三頁。
- (38) 同右、三五頁。
- (39) 同右、四三頁。
- (40) 同右、五四頁。
- (41) 鈴木貞美『日本の「文学」概念』(作品社、一九九八)、『Gullory, John *Cultural Capital: The Problem of Literary Canon Formation* (Chicago and London: University of Chicago Press, 1993); Kernode, Frank *The Classic: Literary Images of Permanence and Change* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1983); Eric Hobsbawm and Terence Ranger (eds), *The Invention of Tradition* (New York: Cambridge University Press, 1983).
- (42) これについては、広尾にある東京都立中央図書館特別文庫室の司書の方々にお世話になったので、ここに記して感謝の意を表します。
- (43) 東京都立中央図書館特別文庫室の司書の話。
- (44) Kornicki, *The Book in Japan*, p.344.
- (45) 原本、翻刻版ともに東京都立中央図書館特別文庫室所蔵。
- (46) 廣野仲助(翻刻)『教訓亭為永』小三金五郎 娘節用 全(栄泉堂、一八八六)三六頁。
- (47) 村上静人(編)『人情本刊行会叢書 第十七輯——清談松の調、仮名まじり娘節用』(人情本刊行会、一九二五)三二六頁。
- (48) 教訓亭為永『小三金五郎 娘節用 全』(一八八六)四二頁。
- (49) 村上『娘節用』三三四頁。
- (50) 教訓亭『娘節用』四三頁。
- (51) 村上『娘節用』三三六頁。
- (52) 教訓亭『娘節用』五二—五三頁。
- (53) 村上『娘節用』三五七頁。
- (54) 教訓亭『娘節用』五四頁。
- (55) 村上『娘節用』三六〇—三六一頁。
- (56) 教訓亭『娘節用』六六頁。
- (57) 村上『娘節用』三八六頁。
- (58) 教訓亭『娘節用』六七頁。
- (59) 村上『娘節用』三八八頁。
- (60) 教訓亭『娘節用』六七頁。
- (61) 村上『娘節用』三九〇頁。
- (62) 笹川種郎『評釈江戸文学叢書 洒落本草双紙集』(大日本雄辯会講談社、一九三六)七五二頁。
- (63) 笹川種郎『洒落本草双紙集』(一九三六)七五二頁。
- (64) 村上静人(編)鼻山人(作)『娼妓美談 籬の花』[「人情本刊行



- 会叢書 第二輯』（人情本刊行会、一九一五）七頁。「蒟蒻本」とは、  
 こんにゃくの大きさの本のこと。
- (65) 村上『籬の花』四三六頁。
- (66) 同右、三頁。
- (67) 神保五彌「瓊末主義と好色」三七五頁。
- (68) 坪内逍遙『当世書生氣質』（岩波文庫、一九三七、再版一九八  
 五）。
- (69) 村上『籬の花』七頁。
- (70) 神保五彌『為永春水の研究』（二九六四）三一六頁。
- (71) 同右、三二二頁。
- (72) 同右、三一六頁。
- (73) 村上『籬の花』四四四―四四五頁。
- (74) 同右、四五九―四六〇頁。
- (75) 同右、四七〇頁。
- (76) 同右、四七一頁。
- (77) 山口剛「解説」『日本名著全集 江戸文芸の部 人情本集』（日  
 本名著全集刊行会、一九二八）九頁。
- (78) 中村『中村幸彦著述集』第四卷、四七九頁。
- (79) 村上『娘節用』二八〇―二八二頁。
- (80) 丸山茂『春水人情本と近代小説』四三―六三頁。
- (81) 鷗外の小説『キタ・セクスアリス』（一九〇九）に『梅兒普美』  
 の名が見える。
- (82) 村上静人（編）『春色江戸紫・花の志摩台』『人情本刊行会叢書  
 第十八輯』（人情本刊行会、一九一六）二頁。
- (83) 『江戸紫』の原本の存在はまだ知られていない。
- (84) 村上『江戸紫』一六三―一六四頁。
- (85) 村上『江戸紫』一一五―一一六頁。
- (86) 村上静人（編）『鶯塚千代の初声・春色玉襷』『人情本刊行会叢  
 書第二十輯』（人情本刊行会、一九一六）五一―六頁。
- (87) 村上『春色玉襷』一頁。
- (88) 村上『春色玉襷』三五五―三五六頁。
- (89) 村上『春色玉襷』二九五頁。
- (90) 伊藤整『日本文壇史——明治思潮の転換期 第六卷』（講談社  
 文芸文庫、一九九五）二二三―二二六頁。
- (91) この作品については、リース・モートン「総合雑誌『太陽』と  
 『女學雑誌』に見られる恋愛観——一八九五年―一九〇五年——」  
 鈴木貞美（編）『雑誌「太陽」と国民文化の形成』（思文閣出版、二  
 〇〇一）五二―五三頁を参照。
- (92) 丸山茂『春水人情本と近代小説』七―九五頁。